

# 青白磁の受容からみた京都と平泉

赤松佳奈<sup>※</sup>

## はじめに

精良な胎土を薄く仕上げた器壁に青みを帯びた透明釉がかかる青白磁は、成形・調整の丁寧さや施文を含むその完成度から宋代を代表する磁器であり、日本の遺跡から出土する良質な輸入陶磁器の代表格でもある。しかし、考古学的に研究された例は少なく、12世紀代に出土する印象はあるが、時期毎にどのようなものがあるのかなどを仔細に論じたものは無い。その理由の大きな部分は、同時期の輸入陶磁器の出土割合を大きく占めるのは白磁で、多量かつ広範囲で出土する白磁に研究上の注目が集まってきたこと、青白磁そのものの出土点数が少ないこと、白磁と青白磁の分類が難しいことで、このため全体像が掴み難くなっていると考えられる。

筆者は京都出土の輸入陶磁器の時期別様相を整理することを試み、現在、12世紀までの陶磁器について取り上げている〔赤松2020・2021〕。取り組む中で青白磁を理解することの難しさに直面していたが、そんな折、岩手大学の劉海宇氏の案内で岩手県・平泉町の出土資料を拝見する機会を得、多数の青白磁が出土していることに驚いた。

平泉遺跡群は遺跡の時期幅がある程度絞り込め、なおかつ幸いなことに輸入陶磁器の数量把握が進んでいる。そこで、京都出土資料を中心に平泉の資料を援用することで、未解決の青白磁の整理に取り組めないかと考えた。

## 1. 京都における土師器皿編年の必要性と年代判定について

考察を進める前提として、時期判断の基準としている土師器皿の編年について述べる。京都<sup>1)</sup>の市街地は平安京を起点として発展し、現在も市域中心部は平安時代の道路を踏襲した街区の上に成立している。その平安京跡の中でも、中世から現在に至るまで都市中心域であった左京域で行う発掘調査は、少なくとも3層以上、多ければ十数層の地層が累重する上、各々の層は人為的な整地層で構成されている。こうした都市遺跡の発掘調査は困難を極める。数層ある整地層には大きな時間の隔たりのある場合もあるが、判別が不可能な短い時間幅の場合もあり、自分が掘削している地層や遺構がどの時代に属しているかは常に遺物を確認しながら掘るより精度を保つ方法が無い。こうした事情から、どの時期でもある程度多量に出土しかつ出土状況から短いサイクルで廃棄されたと推定される土

※ 京都市文化市民局文化財保護課

1) 本稿では“京都”と平安京を起点として、時代に応じ変化しながらつづく“都市”の呼称として用いる。

師器皿を時期判断の基準にしようという動きは平安京跡での発掘調査が本格的に始まった1970年代当初からの課題であった〔赤松 2019〕。そうした動きの1つの集大成が小森俊寛氏・上村憲章氏による「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」〔小森・上村 1996〕で、土器型式の変化は形と法量を基準とし、100年弱の幅をもつ1段階を古・中・新に分けた小段階を設定し、その小段階に紀年銘資料や状況証拠などの実年代推定資料を当てはめながら年代観を与えて編まれたものである。以降、京都市内ではこの編年案を基準として調査を行ってきた。基準を設けて20年以上調査を行うと当然ながら齟齬が見えてくる。蓄積した問題点を解消するために2019年に平尾政幸氏による新案〔平尾 2019〕が発表され、現在はそれを基準としている。更新された編年案は各小段階の幅を30年と一定にした。平安時代から江戸時代まで途絶えることなく製作され続けた土師器皿の変化は漸移的で、数年単位の短い間隔では離散的に見えることがないが、ある程度の時間幅では区分が可能であることから目盛幅を一定に改定した。なお全ての小段階に年代推定資料があるわけではなく、段階区分の年代観は便宜上与えられた仮のものに過ぎない。各小段階の判断は形態の変化と法量の変化を両輪とし、ある程度まとまりを持った土器群が持つ新旧の要素を観察の上、法量分布表（図1）を作成して判定する。群でみるのが重要で出土点数が少なければ精度が落ちる。漸移的に変化

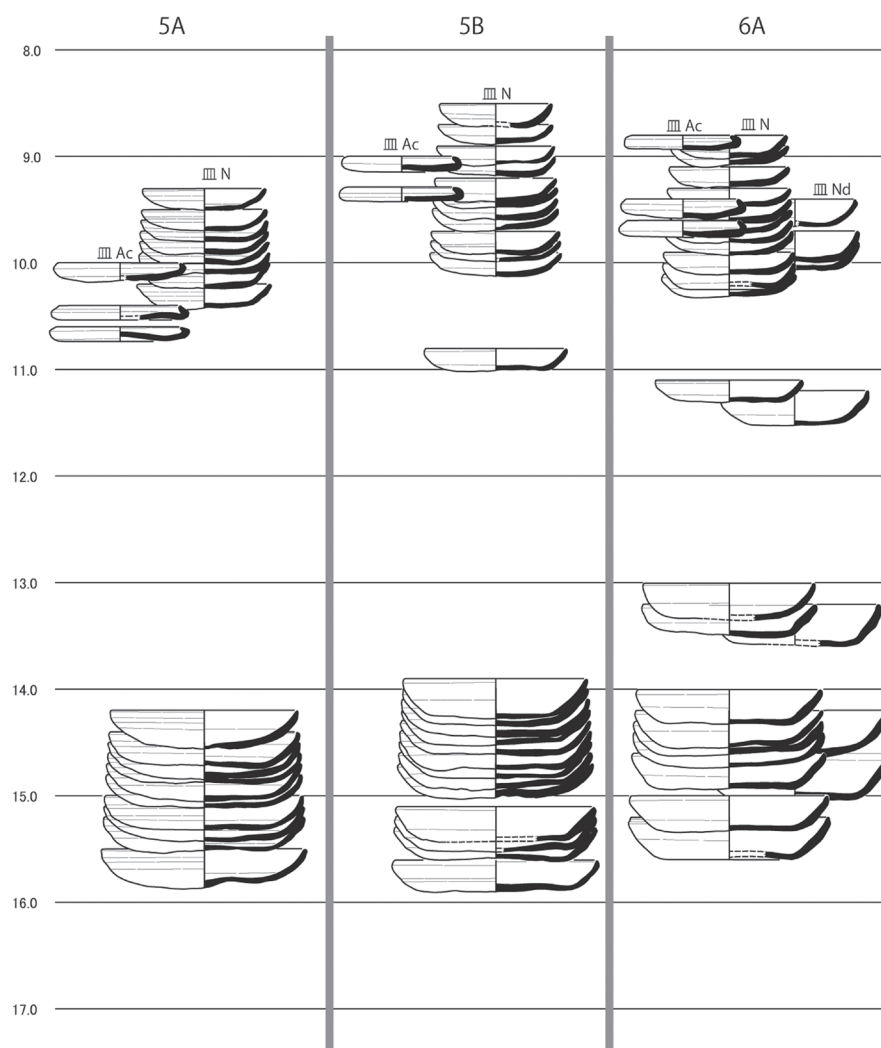


図1 12世紀の土師器皿編年の段階と法量分布（1：6）

する土師器皿は 30 年の年代幅でさえここまでしなければ判定が難しく、その上、土器群には個性があり、群の特徴が設定した各段階の間に見えるものも当然ながら存在する。

しかし 30 年毎の段階設定は、例えば、発掘調査地点の繁栄期の推定や土師器以外の土器類の消長を伺うことを可能とする。京都市内の発掘調査で同じ基準を採用するのは、各調査地点における特徴的な遺構の時期把握が都市全体の歴史的な変遷を浮き彫りにすることがあるからである。

## 2. 京都出土輸入陶磁器における 11・12 世紀の青白磁の様相

### 1) 検討課題と対象とする時期・段階区分について

筆者は更新された土師器皿編年を手掛かりに、先に述べたとおり京都出土輸入陶磁器の時期別様相を整理している。このため本稿で扱う年代観は基本的に土師器の段階区分による廃棄年代である。

なお、9～12 世紀までの出土輸入陶磁器を整理することで把握した年代観への現在時点での理解は要約すると次の 2 点である。1、生産地中国の紀年銘資料と土師器を軸にした廃棄年代の差は 1 段階(30 年)ほどある場合が多い。2、墓や経塚のような埋納資料は中国の紀年銘資料との年代差があまり無く、土師器は同じ段階でも廃棄資料と比べて新しい要素を持つことが多い。

これはどちらも壊れにくい物を手に入れて手放すまでの時間経過として常識的に想定できるあり方で、平均的な寿命の親子が同じ時代に共存していれば持ち物には年代差があるため現在でも起こる型式混在と理解できよう。このため出土輸入陶磁器 1 点毎の年代幅は広く見た方がおそらく実態に近く、時期別様相の把握はある程度数を集めて行うように努めている。とはいえ、輸入陶磁器にも時期別様相はあり、特別な物以外は 50 年以上の年代幅を持つことはほとんど無い。

本稿の検討対象である青白磁の出現期は 12 世紀、この時期の様相は 11 世紀から続く白磁が主体の様相として 11・12 世紀で大きなまとまりを持っている。終焉は、所謂同安窯系・龍泉窯系の青磁と数量比が替わるまでである。京都では 12 世紀末にその状況が見え始める。

白磁が青磁に変わる 12 世紀末から 13 世紀初頭の動きについては輸入陶磁史上の画期であり注視されることはあっても、11 世紀後半から 12 世紀後半までの白磁主体の様相の中で起きた変化についてはこれまでほとんど触れられることが無かった。青白磁は、この段階の様相に小さいが確実な変化をもたらす器種であるにも関わらず、はじめに述べた理由から基礎的な研究が進んでいない。

そこで本稿では、白磁主体の様相の中で青白磁がもたらした意味について検討を加えようとする。そのため対象とする時期は、白磁が主体の様相つまり青磁が多量に出土し始める 12 世紀末から 13 世紀初頭より前で青白磁が出土する 5A 段階(西暦 1110～1140 年頃。以下西暦と頃を略)・5B 段階(1140～1170 年)とする。京都の出土資料については 6A 段階(1170～1200 年)の途中で青磁主体の様相に変わることを<sup>2)</sup>からこの段階出土資料は基本的に含まない。

ただし平泉の資料については源頼朝に滅ぼされた文治 5 年(1189)までが一つのまとまりであり青白磁については全て検討の対象とする。このため京都資料よりもやや新しい時期を含む。平泉の出土割合については後述するが、圧倒的に白磁主体の中に少数青磁が出土している様相から、白磁主体の様相が青磁主体へ変わる前後で終焉を迎えたとみることも可能で、京都の土師器皿による段階区分

2) 土師器の段階区分は輸入陶磁器の画期と異なるため様相変化が段階の途中で見えることもある。また 6 段階(1170～1260 年)の青白磁はおそらく全国的に出土量が微増し白磁主体の様相下にある青白磁と位置付けが同じか現

在はまだ未検討であること、京都では 13 世紀後半 14 世紀前葉にも青白磁が多量に出土する時期があるがそれらとの連続性もまた未整理であることも検討対象としない理由である。

では検討しきれない年代問題への示唆を含んでいる。全国的にも青磁主体への転換が起こるのは13世紀に近い時期と推測できるが、数年単位の推定は不可能で、土師器編年の段階をさらに細分するのは不確実性が高くなるだけであるため、5B段階までとした。本稿で記述する「12世紀の様相」には12世紀末期を含まないと考えていただきたい。

## 2) 京都出土輸入陶磁器の11・12世紀の様相

京都出土の陶磁器を整理する中で、筆者は、9・10世紀の輸入陶磁器は、生産地である唐の貴族墓に収められるような精製品を含むこと。出土器形の種類が唐の流行全てとは一致せず、輸入にあたっては日本側の選択があったことなどを論じた〔赤松 2020〕。続く11世紀前半は一度出土数が減るが、11世紀後半から12世紀末までは逆に膨大な量の白磁が出土する。その多量さは平安時代から近世初頭までの出土輸入陶磁器総数の4～5割に及ぶ（図2）。しかしながら器形の種類は、玉縁状口縁碗・直口口縁碗・小皿・四耳壺・水注程度で前時代に比べ限られた形態がほとんどを占め、量に反比例して輸入白磁の器形種類は少なくなったことを整理した〔赤松 2021〕（図3）。また、この段階は総量が爆発的に増えるにも関わらず精製品の出土量は激減する。つまり、端的に言うと日常品の碗・皿・壺だけが多量に入っているという状況といえ、むしろこの様相が当該期と他の時期の大きな違いであり特徴であるともいえる。

## 3) 11・12世紀の精製品

11世紀代の精製品は、多量に出土する白磁類と器形は変わらないが胎土や釉調が整った白磁、あるいは体部外面に蓮弁が彫られた白磁碗で量は少ない。後者は現在のところ3点出土が確認できる（図4-1）。ただしこの碗はこの段階の精製品ではあるが胎土や釉調は玉縁状口縁碗の比較的高品質なものとは大きな差が無い。

12世紀初頭を含む4C段階（1080～1110年）の精製品には丁寧に調整され釉調の整った白磁の皿（図4-2）やや青味があった釉調の合子蓋（図4-3）、内面に花文のある白磁大皿（図4-4）を各1点確認している。5A段階（1110～1140年）になると精製品は微増し、北方系の白磁の合子（図4-5）内面に型押し草花文が施された北方系の白磁碗（図4-6）と耀州窯系青磁碗（図4-7）が各1点出土している他、青白磁が出土するようになる。

## 4) 青白磁の出現時期

青白磁の出現時期は“何を持って“青白磁”とするのか”という問題に直面するため明言が難しい。それは白磁と青白磁の区別が難しいからで、長谷部楽爾氏は「青白磁といえば、誰でもすぐある種の遺例を思い浮かべることのできるものである。しかしいくらかつきつめて考えると、これはどうもとらえ難い存在になってしまう。（改行）だいたいのところ、青みを帯びた白磁というのが一般的なものと思うが、青みのある白磁というのはいくらかでもあり、それだけのことである筈はない。青白い磁器ということでもなく、青磁と白磁の中間に置かれるから青白磁ということでもないだろう。青白磁という呼称は青磁や白磁の概念とは違って、地域的、時代的に限定された存在についてのもので、普遍的な磁器の一ジャンルをいうのではない。」と述べる〔長谷部 1984〕。

『宋元青白磁』をまとめた馮先銘氏は「中国の歴代の陶磁器の発展は、いずれも一定の法則を持っ

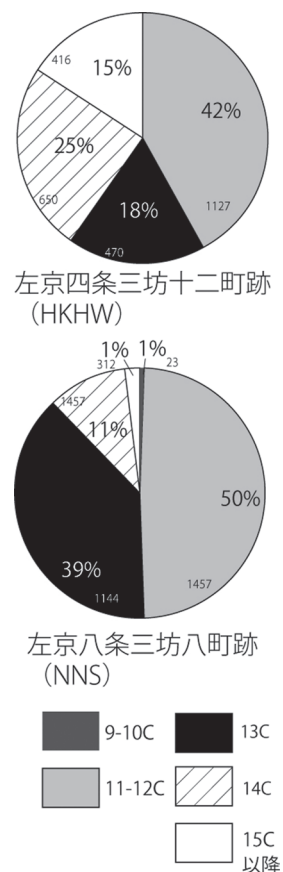
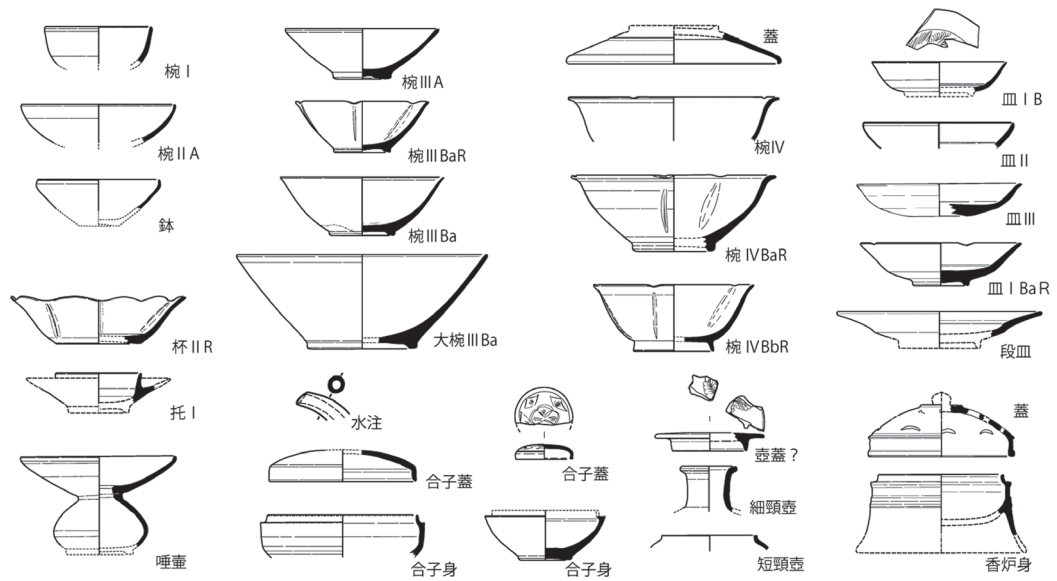


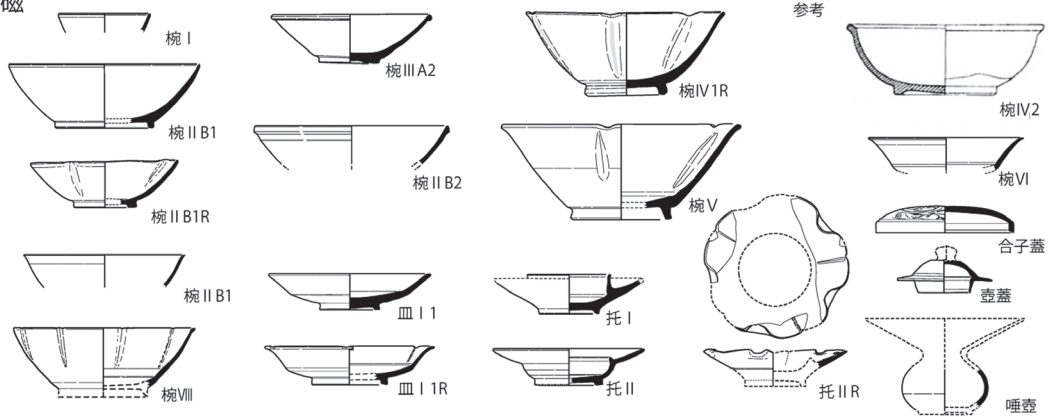
図2 輸入陶磁器の時期別破片数

## 9・10 世紀の青磁・白磁

### 青磁

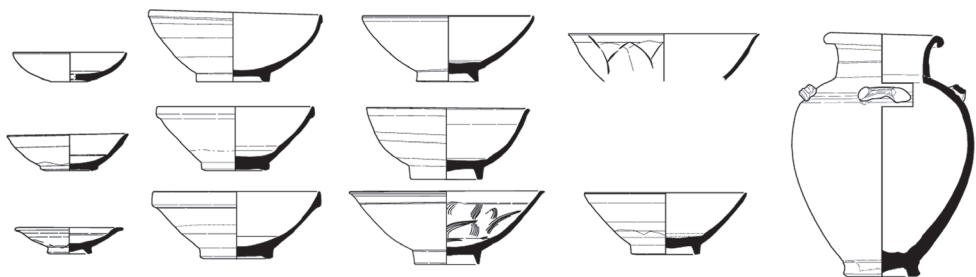


### 白磁

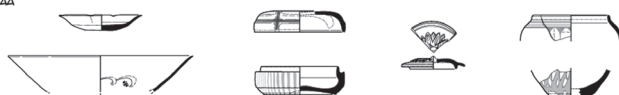


## 11・12 世紀の白磁類

### 白磁



### 青白磁



0 10cm

図3 9・10 世紀と 11・12 世紀の土師器に伴う京都出土輸入陶磁器の様相の比較 (1 : 8)



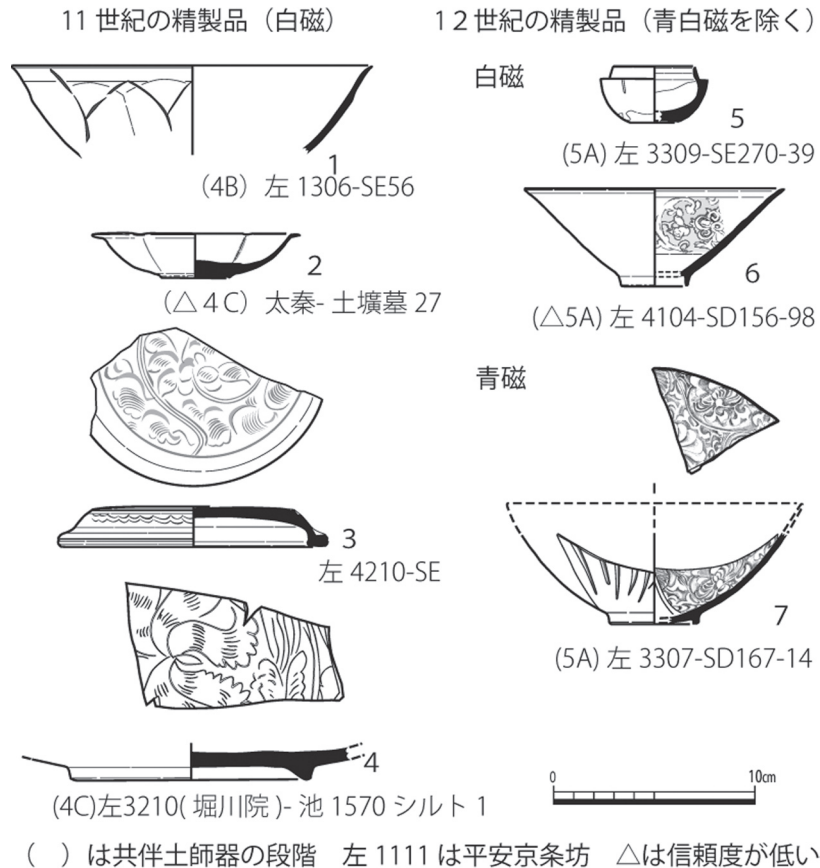


図4 11・12世紀の精製品（1：4）

ており、ある歴史的時期に具体化するには、その一定の法則の他に、それ以外のものからの影響をも受けているのである。〈中略〉青白玉器は、稀少物資として支配階層によって独占され、一般の人々の使用は厳禁されていた。青白磁は、青白玉を得ようとしても得られないという状況のもとに、時代の必要に応じて生まれたものであり、景德鎮の工匠たちが意識的に青白玉器の色調と質感を模倣してできた産物である。』〔馮 1984〕とまとめた。

先学の研究によれば青白磁は、“青磁・白磁といった釉の色調を基準に整理された普遍的な器種ではなく、青白玉をモデルとした器物”であるようだ。なお中国には「玉枕」と詩に読まれた〔馮 1984〕青白磁枕の遺例が多数ある〔上海人民美術出版社ほか 1984〕。

上記を念頭に置いて、本稿では青白磁の判定は青い色調のみならず調整・胎土・形態を加味し分別した。

基準の一つは薄い器壁で、かなり丁寧な調整を施さなければならないことから、雑器とは異なる基準で作成されたと考えた。

次に白い精良な胎土を基準にした。良質な磁土<sup>3)</sup>の白さがなければ青みがかった釉調は生きず、可逆性や耐火性にすぐれていなければ薄い器壁や型抜きによる作りが成立しない。このため白い精良な胎土の成立は青白玉を目指した青白磁にとって重要な特徴である。

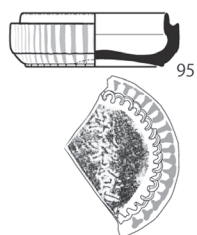
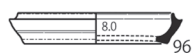
次に器形が13世紀代に型式的に連続するものの出現をもって青白磁の出現と整理した。本稿は

3) 「その磁土を採掘した付近の高嶺山の漢音、カオリンが、磁土そのものの代名詞になっていることでも知られる」

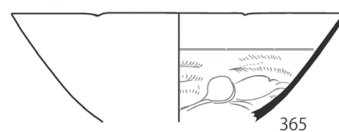
〔佐藤雅彦 1978〕

5A

左京五条三坊五町 SD200

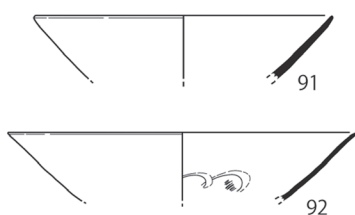


左京四条一坊二町跡池 452

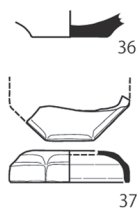


5B

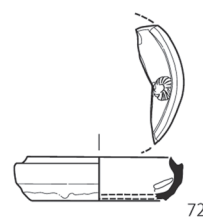
白河街区跡 SX91



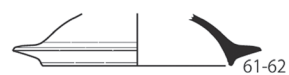
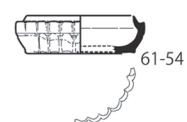
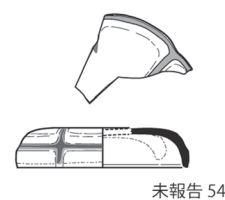
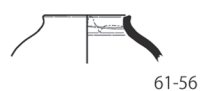
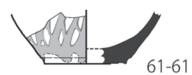
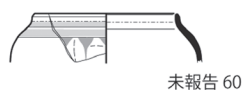
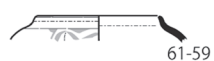
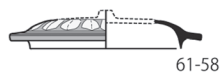
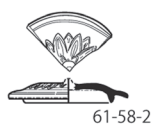
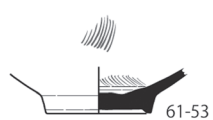
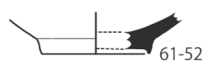
左京三条四坊七町跡 -SK220



平安京左京五条三坊九町跡-土坑61



烏丸線№61 暗茶褐色泥砂層出土資料



※右下数字は報告書掲載番号

図5 京都出土の12世紀の青白磁 (1:4)

白磁主体の様相下での青白磁の様相についてを検討対象とするため、散発的ではなく継続的にある程度の量が出土し始める状況をもって“出現”とする。

12世紀中葉段階で少量見え始める青白磁は精良な胎土でつくられた薄い器壁と光沢のある透明釉といった特徴は兼ね備えているが色調は白に近いものが多い。ただし光の方向では青く見えるため青白磁と考えられる。

なお中国では11世紀後葉の安徽宿松の元祐二年墓（1087）出土資料（水注と温碗）の段階では既に薄い器壁、精良な胎土、青みがかった釉と玉器のような質感といった諸要素が完成されている〔佐藤雅彦1978〕。

以上の理由から色調はやや白いが、器壁を含む形態と胎土が青白磁として成立している5A段階出土品をもって青白磁の出現とみる。なおくどい様だが年代観は廃棄年代である。

そして次の5B段階（1140～1170年）の精製品は現在のところ全て青白磁である。

## 5) 京都出土の12世紀の青白磁

出土青白磁を整理すると、器形の種類は碗・皿・合子・壺形合子（図5）、それから図化資料には無いが水注の取手と壺の頸部片が確認できた。なお壺類の内、所謂梅瓶形の壺（以下梅瓶）は確実な資料が当該期にはまだ無い。

京都全体の数量の把握は難しいが、時期判断が可能な土師器に伴う青白磁はかなり少ない。ただし包含層中の破片資料では輸入陶磁器が多量に出土する調査であれば必ず数十片の破片数があるため一定量が搬入されていたと考えられる。

平泉遺跡群との比較のため、白磁の数量を提示した先述2地点の調査（平安京左京四条三坊十二町跡・八条三坊八町跡）出土資料から、大宰府編年〔山本2000〕の白磁碗Ⅱ類・Ⅳ類・Ⅴ類・Ⅷ類、皿Ⅱ～Ⅶ類、青白磁、12世紀末～13世紀初頭の青磁（所謂同安窯系・龍泉窯系劃花文）碗皿を抜き出すと、その比率は平安京左京四条三坊十二町跡が白磁71%、青白磁8%、青磁21%、八条三坊八町跡が白磁67%、青白磁6%、青磁27%となった。なお、白磁は11世紀代の資料、青白磁には13世紀以降の資料も含む。

次に時期を絞り込んで検討するため、5A・5B段階の土師器に伴う遺構出土輸入陶磁器を集めた。21遺構あり、輸入陶磁器の合計は158点（実測図掲載資料）で、白磁92%、青白磁7%、青磁1%となった（図6）。

遺構出土の青白磁は白磁145点に比べ11点とかなり少ない。しかし先に見た出土状況を問わない破片資料には12世紀の特徴を持つ破片もかなり含まれている。また、遺構出土ではないが、5B段階の土師器に共伴して多量の青白磁が出土した例も1例ある。地下鉄烏丸線建設に伴う発掘調査のNo.61トレンチ暗褐色泥砂層出土資

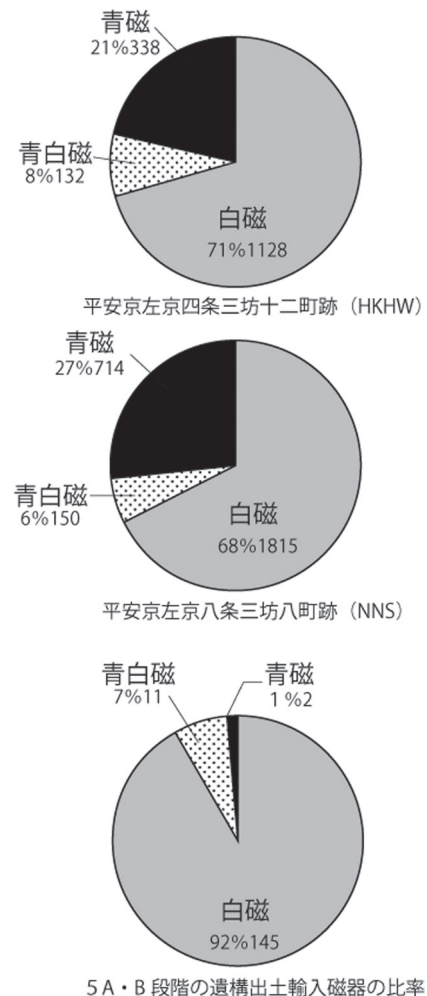


図6 白磁・青白・磁青磁の割合  
(%点数)



料（図5下）である。層中に焼土・炭・焼瓦などを含み、輸入陶磁器類も被熱していることから火災処理に伴うもの（調査区が狭いので土坑かどうかは不明）と考えられている資料で、輸入陶磁器は白磁35点、青白磁79点、他に磁州窯の壺破片、建窯産黒釉碗（天目碗）が含まれていた（筆者カウント）。比率は白磁34%、青白磁80%。京都市内では40年以上発掘調査を行っているが12世紀の土器に伴ってこれほど大量の青白磁が出土した事例はこの1例しか無い。この出土状況から、当時青白磁は貴重品でよほどのことが無ければ廃棄されるものでなかったと推定される。そしてまた全てがこれほど極端ではなかったかもしれないが12世紀に保持されていた青白磁の比率は遺構からみた出土比率よりも実際には高かった可能性も指摘できる。

### 3. 古墓・経塚出土資料にみられる青白磁

発掘調査で出土した資料ではないが、12世紀の京都（近郊含む）に多数の青白磁が搬入されていた根拠の一つとして、古墓、経塚資料にみられる青白磁についても検討してみたい。埋納資料の場合は土坑などの廃棄資料に比して新しい特徴をもつ場合が多い。宇治市善法古墓は白磁を含めた良好なセット関係の好例であり、経塚は在銘資料を中心に検討する。

#### 1) 宇治市善法古墓資料

京都近郊で12世紀段階の青白磁を含む輸入陶磁器のセット関係が伺える好例として宇治市の善法古墓資料を紹介する。善法古墓は平等院の南南西約300mの段丘上に位置する宇治善法地区の茶畑から昭和20年代に不時発見された古墓（推定）で、八木隆久氏が善法地区の歴史資料を調査した際に存在が明らかになった。聞き取り調査では茶の木の植え替え時に鏡・輸入磁器・釘がまとまって出土したという。この状況から古墓と推定され出土資料の実測図が掲載された（八木・杉本宏1987）。白磁碗1、白磁皿1、青白磁合子1組、青白磁小皿1、群笹双鳥文鏡1が伝わる（図7）。青白磁合子の底部には「李家合子記」と型押しされていることから景德鎮窯産と推定され〔馮1984〕、小皿・合子とも良質である。

なお報文では鏡の年代が13世紀後半と判定されたことから輸入陶磁器は12世紀後半に見えたとしながらも墓の年代は13世紀後半としている。しかし、磁器類は12世紀後半代のまとまった様相を呈しており、13世紀代の墓で輸入陶磁器だけが古いものを収めた類例が無いこ

とから、筆者は鏡の年代観が誤解されているか<sup>4)</sup> 輸入陶磁器と鏡が本来は別のものであったと考え

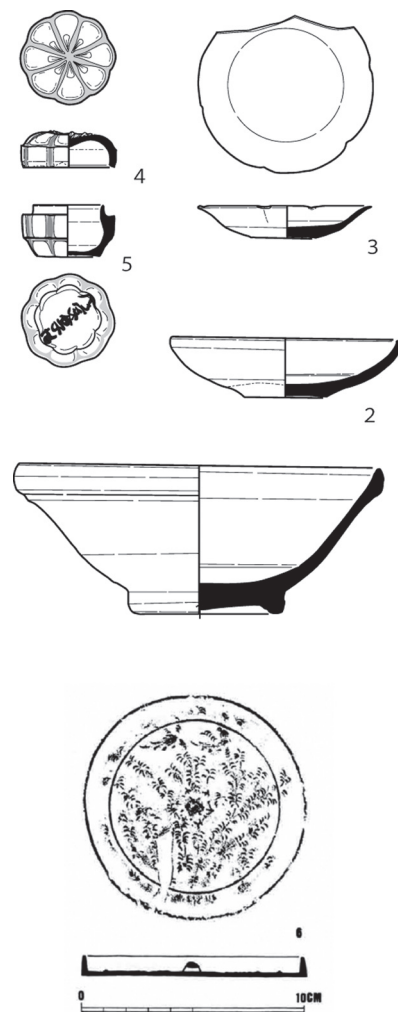


図7 宇治市善法古墓出土資料（1：4）  
鏡：八木・杉本1987転載。他筆者実測

4) 截頭円鈕、直角縁で外縁頂部幅が狭い、圈線を意識しない文様構成、薄肉で文様の彫りが繊細、鳥文様の尾部表現が後世の雀文様と異なり古い表現を残していることから平

安時代の様相を留める鎌倉時代前葉の作例と判断されているが、列記された特徴から平安時代後葉と考えることも可能ではないか。

ている。

発見された地点は平等院から約 300 m の段丘上で平等院の寺領の内であったと推測される。

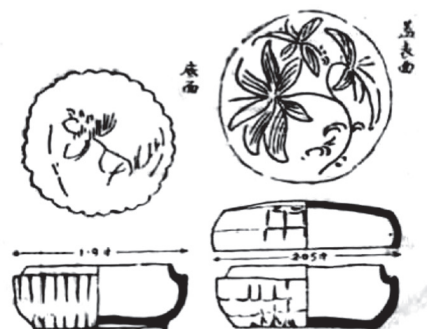
## 2) 経塚出土資料

平安京の近郊で見つかった経塚のうち、なんらかの形で青白磁が出土した経塚には花背経塚三・五・六号、將軍塚経塚、清水寺経塚、広隆寺経塚（弁天島経塚）、南原経塚（石作経塚）、大比叡経塚（比叡南岳経塚、比叡山頂経塚）などがある〔三宅敏之 1994〕。埋納された器形は合子・壺形合子・小皿があり、鞍馬寺経塚資料には小壺がある。

このうち在銘資料や状況証拠から年代観や造営者が伺える資料について検討し、遺跡出土品の補足としたい。

経塚はいずれも明治～昭和初期の工事で発見されており遺構の情報が欠落していることが多いが、聞き取り調査の中には信憑性のあるものもある。

花背経塚は京都盆地北東の山中、京都市左京区花背別所町の旧花背峠に近い山丘の尾根上に営まれた紙本経塚群で、七基の塚が発見されている。大正 10 年（1921）・昭和 2 年（1927）に山林作業中に発見され、発見当時の聞き書きではいずれも小石室が構築されていた〔魚澄惣五郎・梅原末治

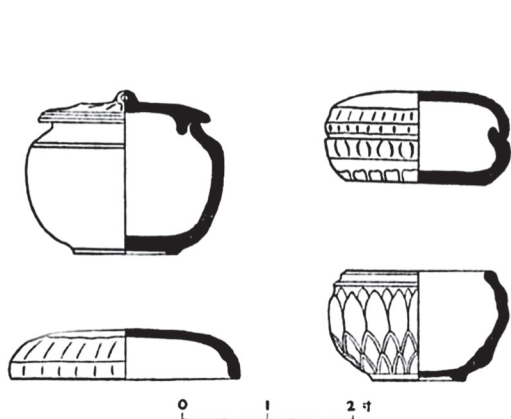


1 号経塚出土青白磁

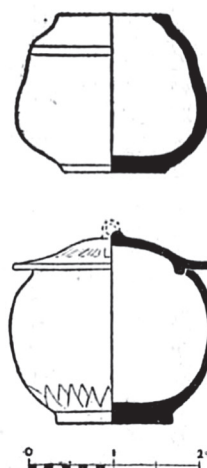


3 号経塚出土青白磁

1・3 号経塚出土青白磁 『京都府史蹟勝地調査會報告』第四冊 1923 より転載



5 号経塚出土青白磁



6 号経塚出土青白磁

5・6 号経塚出土青白磁 『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第一〇冊 1929 より転載

図 8 花背経塚出土青白磁

1923、佐藤虎雄 1929)。大正 10 年に発見された 1 号経塚は経筒に針書きで「正六位上佐伯正親女弟子□太子 仁平三年三月□□」の銘があったことで知られる。石室からは陶製容器に納められた銅製経筒と銅製筒に納められた毘沙門天像、銅製火舎、銅製六器、銅製花瓶、青白磁合子、短刀、鉄片が、石室外から鏡、短刀、青白磁合子、青白磁皿が発見されたという。仁平三年は西暦 1153 年でちょうど 12 世紀の中頃に当たる。発見された青白磁には合子 1 組、蓋を欠いた合子身 1、またこの他に「図版第四に載せたる大形器の破片一個あり現在のもの器底のみなるを以て全形を察し難きも、薄手の精巧品にして、底径一寸一分、開きの大なるよりせば大型の皿若しくは鉢の類とすべきか(原文；旧字体、カタカナ)」と書かれたおそらく皿の破片が出土している。

また 3 号経塚からは青白磁の小皿と壺形合子が発見されている。在銘資料はないが他に大型壺、銅製経筒、経巻、銅小塊、玉、銅鏡、土製花瓶、鉄器などが埋納されていた。

昭和 2 年に発見された 5 号(昭和 2 年 1 号)経塚は割石積みの石室があり、土製経筒外容器、銅製経筒、銅鏡、白磁合子、木製品、素焼土器(土製花瓶・火舎・六器)、古銭、刀剣が発見された(佐藤 1929)、経筒には保元二年(1157)の紀年銘と僧良念、僧西持らの名が刻まれていたという(三宅 1994)。白磁合子は青白磁のことで合子 1 組、同蓋 1、壺形合子 1 組、同身 1 が図示された。6 号経塚は、在銘資料は無いが、宝相華唐草文が胴部に描かれた陶製筒容器や金銅製独鈷杵、金銅製五鈷鈴とともに青白磁の壺形合子 1 組、身 1 が見つかった。図や写真などで確認できる青白磁は合子・壺形合子とも各々類似の形態をしており 12 世紀中葉の合子の一例として貴重な資料といえる(図 8)。

次に、これも京都盆地北東に所在する鞍馬寺本堂背後の山腹に営まれた鞍馬寺経塚出土資料をみる。明治 11 年(1878)～昭和 6 年(1931)までの数度の工事で多量の遺物が発見されたことで知られる経塚群である。ただし工事時の発見のため遺構や遺物の組み合わせなどは明らかではない。出土品は宝塔、紙巻残欠、経筒約 30、外筒 5、仏像、鏡、鏡像、懸仏、独鈷杵、六器、花瓶、水瓶、利器類、玉類、合子、銭貨、硯、提子、鋏、金具類など 300 点以上を数える(橋川正 1926、田澤金吾 1933)。

在銘資料は 3 点あり、最も古い保安元年(1120)の願主である清原信俊は銘文①に主税助(正六位下相当官)兼大学寮の助教とある(図 9)。

他の 2 点の銘文は以下の通りである

②「奉為源親実二親成仏得道也 治承三年十月十五日」(治承三年：1179)

③「為父母師長 井禅尼聖霊 往生極楽也 法橋院尚 僧光完」

③の院尚は仏師で『僧網補任』によれば寿永三年(1184)に法橋(法橋上人位：律師に与えられる)に叙せられているから、埋経年代は寿永三年以降となる(田澤 1933)。

『鞍馬寺経塚遺宝』によれば出土した青白磁は合子総計 10 点(1 組身 7 点蓋 2 点)、壺形合子 5 点(3 組蓋 2 点)、小壺 1 組で明治十一年発見のものは京都国立博物館に所蔵されている(図 10)。京都国立博物館が所蔵する明治発見の合子類は花背経塚と類似の特徴を有しており、12 世紀代の資料と推定される。

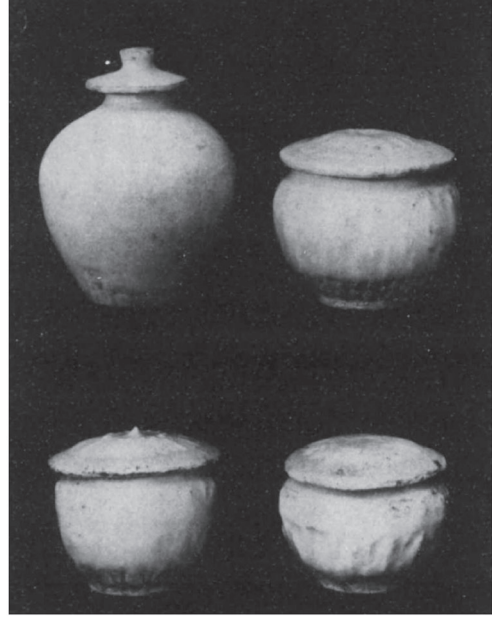
妙法蓮華經一部八卷  
無量義經 觀普賢經  
彌勒上生經 彌勒下生經  
彌勒成仏經等各一卷  
保安元年九月十一日主税助兼助教清原  
真人信俊 誂請四口大法師 重怡 賢俊  
賢宴 禅意  
十箇日内如法如説奉書寫畢過去二親  
共生仏前常聞此形乃至法界衆生  
平等利益敬白

図 9 銘文①





京都国立博物館 所蔵・写真提供



『鞍馬寺経塚遺宝』鞍馬寺 1933 より転載



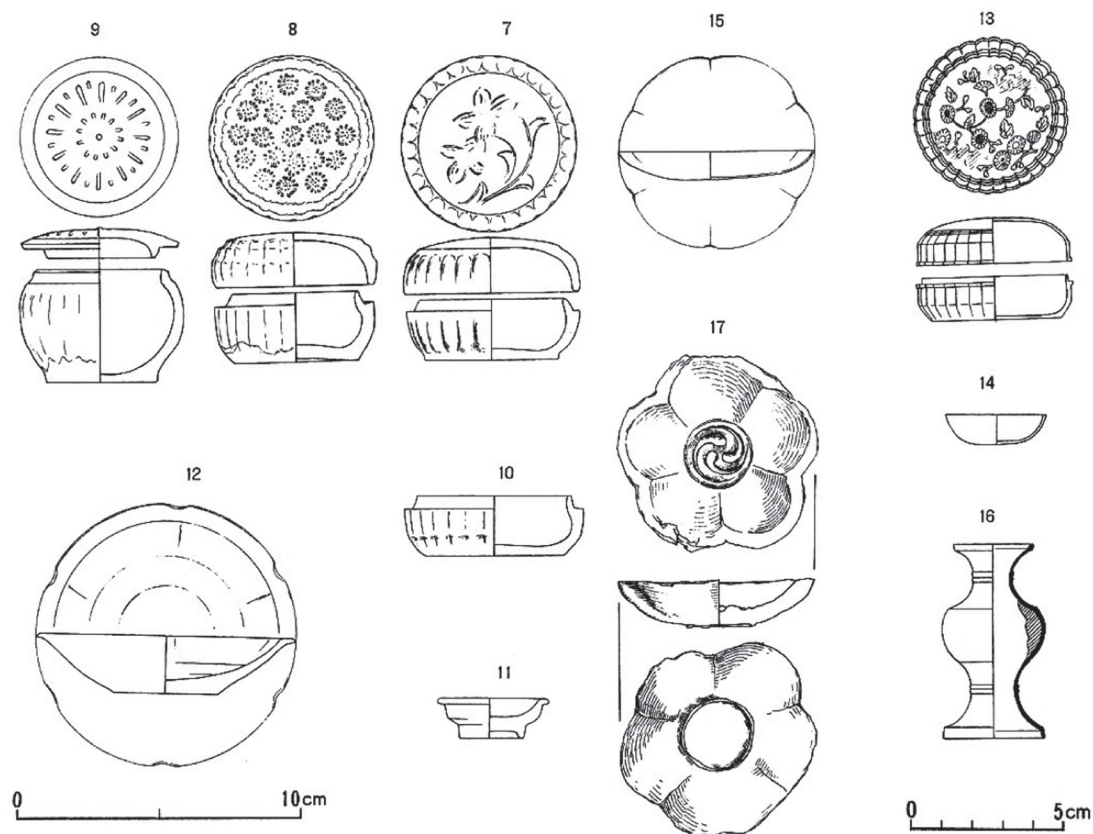
『鞍馬寺経塚遺宝』鞍馬寺 1933 より転載



『鞍馬寺経塚遺宝』鞍馬寺 1933 より転載

図 10 鞍馬寺経塚出土青白磁

最後に、京都市伏見区の稲荷山中腹で見つかった稲荷山経塚資料を検討する。明治 44 年（1919）に採土中に発見されたもので、聞き書きによると板石で小石室を設け周りを石塊で多いその上を土で覆った一辺約 2 m の垣石が巡る方形の塚であったという。在銘品はないが群を抜いて豊富な埋納品が発見されている。遺物は石室内と石塊中から陶製外容器、銅鑄製経筒、鏡鑑類、青白磁合子・皿、



安藤信策 2010「稲荷山経塚覚え書」より転載（元図『稲荷山経塚』1966）

図 11 稲荷山経塚出土青白磁ほか

白磁小杯、銀製鍍金合子、銅製小鉢・皿、錫製椀子、金銅花瓶、銀製杓子、銅製簪、刀身、ガラス玉、水晶数珠玉、錫製丸玉、飾金具、延金、砂金 1 包、銀塊、銭、経巻軸、紙片など総数百余点を数え、単独経塚としては最も多種・多量の遺物が埋納されていた〔三宅 1994〕。青白磁は石室外から壺形合子 1 組、合子 3 組・身 1、小皿が見つかった（図 11）。この経塚は平安時代末期の公卿藤原兼実の日記『玉葉』養和二年（1182）四月十六日条に見える最勝金剛院山付近に営んだ埋経に比定できる可能性が高い〔三宅 1970〕。藤原兼実の造営したものであれば、本稿で主に扱う 5B 段階（1140～1170）よりもやや新しいが、奥州藤原氏の終焉に年代観が近い。図 9 下段の 8・13 の蓋に施された小さくて細かい草花文は京都では次の 6A 段階（1170～1200 年）に出土する合子に見られる意匠である。

提示できる好例は少ないが 12 世紀中頃から後半の墓・経塚には合子・壺形合子・小皿などが、埋納されていることがわかった。

ところで経塚造営の最も早く確実なものは藤原道長が長徳 4（998）年に発願し（『御堂関白記』同年八月十一日条）寛弘 4（1007）年に大和の金峯山山上蔵王堂の宝前に営んだ例である（経筒の銘文は寛弘四年八月十一日）。発見は江戸時代で、金銅製の経筒や直筆の経巻が今日まで伝世しているが輸入陶磁器は無く、納入されていなかった可能性が高い。

平安京近郊に営まれた 11 世紀代の経塚も輸入陶磁器類が埋納された例は現在のところ知られてい



ない。

紀年銘がある経塚出土の合子を集成した森本朝子氏〔森本 2003〕は「一般的には合子を出土する経塚はほとんど 12 世紀におさまり、また合子の種類は陶磁器の場合すべてが青白磁である。」とまとめている。

なお経塚は、それを造営する段階である程度の財力があつたと想定できる人々の産物であるが、その中でも青白磁を伴うものは特に埋納品が多様な傾向にある。検討対象とした在銘資料からは造営者がある程度の地位と財力のある人物であるとわかる。取り上げた以外の多くの経塚には青白磁が伴っていない。しかし代わりに出土数の多い白磁椀が入っている例は京都近郊では管見の限り無い。青白磁、とくに合子類が埋納資料の多数を占めているのは意味があつたと考えられる。

繰り返しになるが 12 世紀後半はかなり多量の白磁椀が出土する時期である。青白磁は全体の出土比率と経塚の埋納状況から見るかぎり貴重品と考えて間違いないだろう。これによって逆に様々な階層が集住する京都の都市遺跡出土品は白磁しか所持できない人々もあり青白磁の比率が低くなることも説明できよう。

## 4. 平泉遺跡群出土輸入陶磁器

以上が京都資料から見た 12 世紀の青白磁の出土状況である。「京都」という都市遺跡は 12 世紀に限らず連続した時間幅と多様な階層が集住している点が面白さの一つであるがこれが様々なものの理解を困難にしている要因の一つでもある。これに対し平泉遺跡群は奥州藤原氏にまつわる居館・庭園・寺院・金鶏山などを含む一つの都市跡といえる遺跡で、12 世紀の輸入陶磁器が多量に出土する遺跡の一つでもある。先に述べたように輸入陶磁器の数量把握を含む研究が進展しており、出土量の集成・比率の検討については 1996 年に八重樫忠郎氏〔八重樫 1996〕が発表して以来、羽柴直人氏〔羽柴 2009〕・三浦謙一氏によって更新され現在は 3600 点以上の出土が把握されている〔三浦 2015・2019〕。

白磁が多く青磁が少ないのは奥州藤原氏の滅亡と関係があると考えられており〔羽柴 2009〕このことから様相の時期幅をある程度絞り込める。

平泉遺跡群の中でも政庁跡と推定されている柳ノ御所遺跡からは全体の 62% の磁器が出土するという。柳ノ御所遺跡出土の輸入陶磁器は白磁壺類の出土量が多いことは八重樫氏が 1996 年に指摘している。

最新の統計によれば〔三浦 2019〕各器種の比率は白磁 76% 青白磁 14% 青磁 10% であるという（以下、平泉遺跡群出土資料の数値については三浦 2019 より引用）。壺については指摘されてきたが、実は青白磁の比率も全国的に見てかなり高い。

先に見た当該期の京都の青白磁の比率は 6～8% で、博多遺跡群〔田中克子 2019〕資料でも圧倒的に白磁椀・皿類が多いことから青白磁の比率は低くなると考えられる。白磁椀皿の形態は京都で 5 B 段階（1140～1170 年）出土のものに類似する。青白磁もよく似た器形が出ているが、椀皿類が多いのが特徴的である。青白磁 14% の内訳は、青白磁椀・皿 320 点、壺類 69 点、合子 50 点、椀皿類が 73% を占める。

代表的な資料は平泉町教育委員会実施の柳ノ御所遺跡第 53 次調査〔平泉 2001〕で井戸から出土した椀（図 12 上）、倉町遺跡 4 次調査 1 号建物の周辺から出土した青白磁（図 12 下）などがある。この 1 号建物は『吾妻鏡』の「高屋」（文治 5 年 9 月 17 日条）に比定される可能性がある遺構である。

柳之御所遺跡第 53 次井戸



倉町遺跡 4 次調査

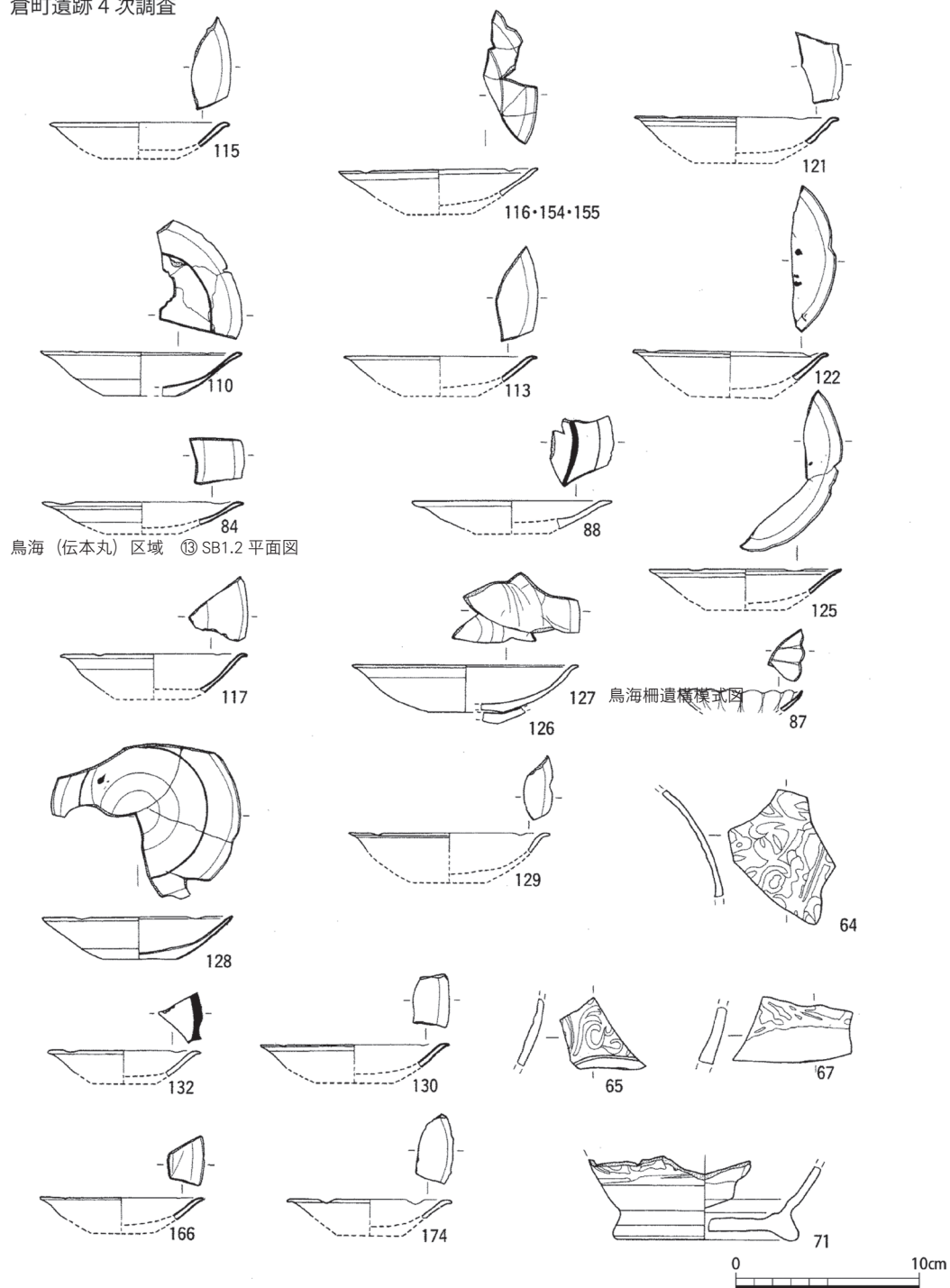
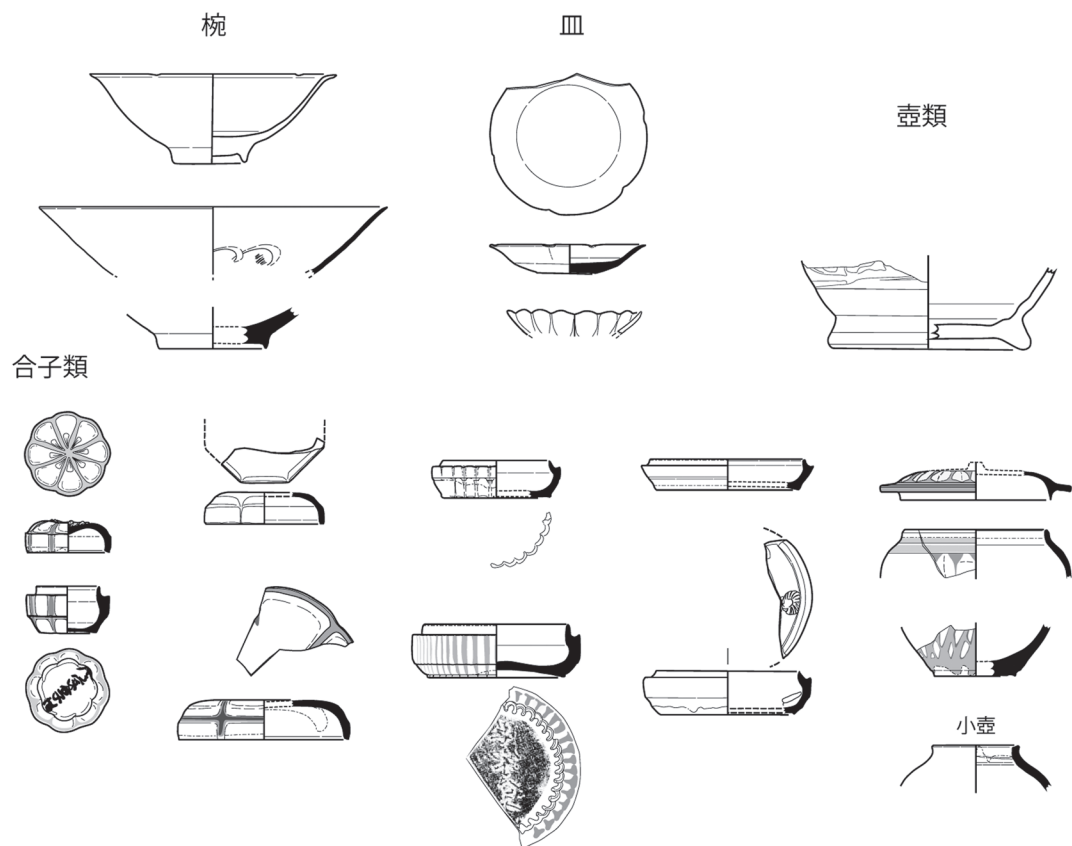


図 12 平泉遺跡群出土の青白磁 (1 : 4) 柳之御所 53 ; 平泉町教育委員会 2001 を引用・再トレース  
倉町遺跡 4 ; 平泉町教育委員会 2019 を転載

## 青白磁



## 12 世紀後半に主流となる白磁の碗・皿

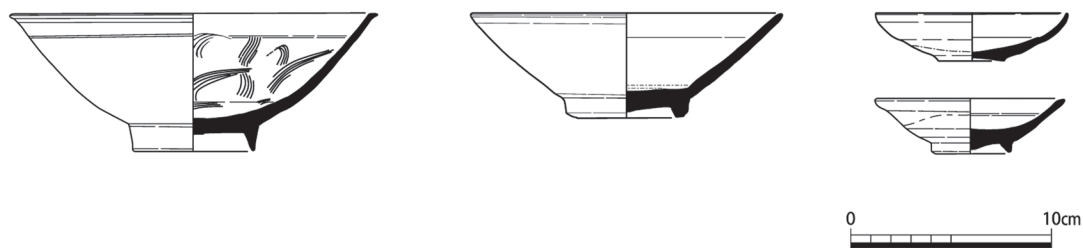


図 13 12 世紀の青白磁の主な器形（1：4）

点数が多い一因である、「高屋」跡（推定倉庫）の可能性のある遺構を発掘したことは大きい。とくに同形の小皿が多数出土していることは特筆に値するだろう。なお、この小皿は宇治善法古墓や花背経塚、烏丸線No. 61 暗褐色泥砂層出土の皿と類似したもので、口径には大小がある。これらを一括して保管していたと推定される状況は当時の奥州藤原氏、ひいては“財力を有し、ある程度の地位のある人々”の受容実態を推し量る良好な情報といえよう。

## 5. 12 世紀の青白磁とその価値

### 1) 京都と平泉

以上京都と平泉の出土資料をみてきた。それでは改めて 12 世紀の青白磁にはどのような器形があるのかを整理しよう（図 13）。

供膳具には碗と皿がある。碗は現在のところ口縁端部が外に折れる碗と直口碗の 2 種が確認できる。皿は口縁部輪花の小皿（堆線を持つものと持たないものがある）、花卉を象った小皿がある。合子類は主に平形合子と壺形合子がある。これとは別に装飾の無い小型の容器の小壺がある。壺類は図示できる良好な資料が無かったが壺と水注がある。平泉では梅瓶が出土しているが筆者は梅瓶が数量的に輸入されるようになるのは 12 世紀末と考えているのでここでは取り上げなかった。これは今後の課題としたい。

以上が器形の種類である。馮先銘氏は『宋元青白磁』において「景德鎮で焼成した青白磁はおもに日常生活に使う器物が中心で、たとえば、飲食用の碟や盤、碗、飲食用の酒注や温碗、杯、盞をはじめ、鉢や洗、香炉、灯器などがある。これら各種の器物は大小の区別があるばかりでなく、造形も多種多様でさらに刻花文や篋点文、劃花文、印花文などで装飾されている。」〔馮 1984〕とまとめている。このうち日本で確認できる供膳具は碗 / 盃（碗）と碟（皿）の一部だけということだからやはり器形の種類は少ない。

なお、碗の 2 種は、京都では 5 B 段階に出土量が増える白磁碗と形態が類似する。皿も出土量が多い輪花皿は、白磁でいえば碗に伴って多量に出土する小皿と同等に位置づけられる。水注や壺の器形も大きな差は無い。

従って器形の種類の構成からは、特に 12 世紀後半の青白磁は同時期の白磁と類似した器形構成であることがわかり、このことから青白磁は白磁に替わり手に入れることが可能になった高級品であるとも整理できる。新しく増えたのは合子類だけで、碗・皿類には新しい要素は特になくただ品質が向上しただけである。白磁の出土量は変わらないため輸入関係者の入れ替えは想定できない。器形の種類が類似しているなら流行の転換でもない。

ただし合子類は新しい流れである。用途の一端は先に述べた経塚出土資料が教えてくれる。とは言え都市部の遺構からも多数出土する。中国では盛装用の化粧類や香料が入っていたと推測されている〔馮先銘・王莉英 1991〕。

合子は日常品である碗皿に比べ高級感のある器形で、全体量は少ないが 9・10 世紀では、特に越窯や定窯系の精製品が多く出土する遺跡から出土する傾向にあった。ところが 11 世紀後半～12 世紀初頭まではほとんど出土例が無い。日本の輸入陶磁器で、合子といえば青白磁の印象があるのも 12 世紀から 13 世紀にかけての日本で合子が盛行したからではなかろうか。

### 2) 中国での青白磁の位置付け

京都・平泉の出土資料から、日本では 12 世紀の青白磁は高級品として扱われていた可能性が指摘できるが、では中国ではどのように考えられていたのであろうか。

中国の宋代の紀年銘墓からは青白磁が多数出土している（表 1）。また墓以外にも四川省の穴蔵、遼の古城跡などの遺跡から出土した宋代の青白磁は多種・多様で、「日用必需品である盃・盃・盤・碟は多くの型式があり、酒器には執壺・水注・浅盃と盞托などがある。容器には形の優美な瓜稜罐があり、陶枕には象形枕・獅子形枕、炉には鏤空〔透かし彫り〕香炉がある。盛装用化粧品および香料を入れる盒はさらに豊富であり、ほかに人物や鳥獣を浮き彫りであらわした蓋瓶や穀倉などの明器も

| 出土地点  | 紀年墓の年代          | 出土青白磁件数               |
|-------|-----------------|-----------------------|
| 江西鄱陽  | 北宋政和元年（1113）    | 盒子 2 件                |
| 湖北麻城  | 北宋政和 3 年（1113）  | 瓶、注子、注盃、盞、托子、盃、碟 14 件 |
| 河北宣化  | 遼元慶 6 年（1116）   | 盞托 1 件                |
| 浙江紹興  | 南宋紹興 19 年（1149） | 盒子 1 件                |
| 広東潮安  | 南宋乾道 8 年（1172）  | 盃 1 件                 |
| 江西景德鎮 | 南宋乾道 8 年（1172）  | 盞瓶、炉                  |
| 江西景德鎮 | 南宋乾道 9 年（1173）  | 壺 1 件                 |
| 遼寧朝陽  | 金大定 24 年（1184）  | 碟 2、盃 1 件、            |
| 江蘇蘇州  | 南宋淳熙 10 年（1184） | 合子 1 件、               |
| 江西景德鎮 | 南宋淳熙 11 年（1185） | 盃                     |

〔馮先銘・王莉英 1991〕より抜粋

表 1 12 世紀代中国の紀年名墓出土青白磁

ある。〕〔馮先銘・王莉英 1991〕という。

北宋時代の中国山東地域の南方産陶磁器の流通について宋墓副葬品を中心に分析した徐波・徳留大輔 両氏の研究〔徐・徳留 2015〕によれば北宋後期（1068～1127）の山東地域には内陸部にも青白磁などの南方産磁器が流通するようになるが「その需要層、あるいは流通しそれを使用できる人々は、一定の経済的実力を有する士大夫以上の人々であり、一般的には在地の白磁が流通し、使用されていた状況」であると分析する。

先にも述べたように馮氏は新安沖海底の引き揚げ品にある景德鎮産の青白磁碗の見込みに「玉出崑山」と書かれていることなどから青白玉を模して作った「仮玉器」が青白磁であると説いており〔馮先銘 1984〕同時代の中国でも青白磁は高級品でありそして多様な器形の種類があったといえよう。

## まとめ 青白磁の受容からみた京都と平泉

これまでの検討から、以下のことが明らかとなった。

- ・青白磁の出現時期は 12 世紀前葉、出土量が多くなるのは中葉以降。
- ・京都では白磁が多く青白磁の出土比率は 6～8% 程度、平泉では比率が高く 14%。
- ・器形の種類は少なく、碗・皿・合子・壺形合子・壺類で構成される。
- ・碗の器形は白磁と類似する。
- ・墓・経塚資料からはある程度の財力のある人々が受容したと推測される。
- ・同時代の中国では多種多様な青白磁があり中国でも高級品であると想定される。

12 世紀の青白磁と同時期の白磁の差は基本的には品質差であり、青白磁の方がより高級品であったといえよう。

様々な経済状況・階層の人々が集住する京都の都市遺跡から出土する 12 世紀の輸入陶磁器は白磁



碗・皿類が圧倒的に多い。都に住む人々であっても、高品質のものを一定量手に入れられる財力がある者は限られており、比較的安価で壊れれば廃棄されたであろう白磁碗・皿類が多くなるのは都市的な様相であるとも言える。

これに対し平泉遺跡群は奥州藤原氏の拠点跡であり出土する輸入陶磁器の大半がその時代のものである。青白磁の比率が高いあり方は財力のある需要層の好んだ様相を反映していると考えられる。

経塚資料のうち青白磁が出土し造営者が推測できるものは3例しかないが、いずれも中級官人以上の人々であった。また、善法古墓は平等院鳳凰堂の南南西約300mの段丘上に位置しており平安時代には平等院の寺領の内であったと推測される地域である。

都市出土資料も5A段階の青白磁碗が出土した平安京左京四条一坊二町跡池452は白河天皇の蔵人も務めた平安時代後期の公卿藤原為隆の邸宅跡に伴う池跡と推定される遺構であり、5B段階の青白磁碗・合子が出土した白河街区跡は白河法皇などによって建立された六勝寺と共に成立した街区跡にあたる。

平安京内の調査では、藤原頼通邸である高陽院跡などでも発掘調査が行われており、高陽院に伴うと推定される池を発掘しているが、輸入陶磁器は他と比べれば精製の白磁（大宰府分類碗XI類）の細片とやや古くみえる白磁器<sup>5)</sup>が出土しているだけである。無かったものは証明が難しいが11世紀から12世紀初頭の輸入陶磁器をみる限り、中国の紀年銘墓へ納められた陶磁器類<sup>6)</sup>に匹敵するようなものを一定量輸入していたとは考えられない。

しかし道長の経塚や平等院鳳凰堂には華美な金工品などがあり、11世紀の輸入陶磁器に精製品が少ないのは単純に財力が足りなかったからであるとは考え難い。

11世紀後半から12世紀前半の“多量の陶磁器が輸入されているのに精製品が少ない”と言う特異な状況を少し変化させ、中国の紀年銘墓へ納められるような品質の良い陶磁器を求めるようになったのが12世紀以降の動きと言えるだろう。しかしその変化は基本的な器形の構成が変わらない“上位方向への質の拡大”という類例のあまり無いものとなった。

12世紀中頃から出土量が増える青白磁はこの時期に高級輸入陶磁器の需要が起こったことを示しているが受容層に限られるためか京都での出土比率は白磁が多量であるだけに低い。それに対し高い比率で青白磁を含む平泉遺跡群出土資料は、時期と受容者がある程度限定されるだけに様相の特徴がシンプルにみえ、特異な資料であることが改めてわかった。

平泉に搬入された輸入陶磁器は、白磁碗皿類が京都や博多に比べて少ない。この器種割合は、博多の出土状況に鑑みると、輸入したものを手付かずで持って行った場合には在りえない比率であることから、日本国内で手に入れたものを搬入したと考えることが可能であり、その経由地は歴史的経緯から京都に他ならないと推測できる。

平泉の文化遺産として良く知られる「金銀字交書一切経」や「中尊寺金色堂」、宇治平等院鳳凰堂を模したと言われる「無量光院」浄土庭園などから奥州藤原氏の信仰・財力・文化レベル、京都との繋がりなどは既に周知されているが、発掘調査によって集められた細片データの集積もまた当時の奥州藤原氏の財力と流行に対する感受性を教えてくれる。

加えて、京都の出土資料との比較によって、京都がもつ都市らしい雑多さと平泉のもつ受容者が限られる場合のまとまりについて考察することが出来た。このような比較が可能な遺跡は稀にしかない。何より遺跡から出土した輸入陶磁器の細片を集める。あるいは集めて数える。といった地味な作

5) 北方系の胎土、釉調の優品であるが、高陽院時期には北方系の優品の出土がほとんど無く、肩がやや突ったプロポー

ションも10世紀代の特徴をもつ。

6) 例えば耀州窯産青磁。

業が必要になる。それは発掘・報告担当者の遺跡への情熱と高い意識の賜物であり、感謝の意を表したい。

## 謝辞

本研究を行うにあたり以下の皆様・機関にお世話になりました。記して感謝の意を表します。(敬称略 個人・機関五十音順)

上村和直、大立目一、尾野善裕、児玉光代、佐藤隆、新田和央、平尾政幸、劉海宇、吉川義彦、岩手県教育委員会生涯学習文化財課、宇治市歴史まちづくり推進課、京都国立博物館、京都市埋蔵文化財研究所、古代文化調査会、平泉文化遺産センター

また吉川義彦・平尾政幸・新田和央氏には破片データの提供を、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所には実測図データの提供をいただきました。

## 引用・参考文献

### 〔報告書 京都〕

関西文化財調査会 2020 『平安京左京八条三坊八町跡・東本願寺前古墓群』(NNS)

京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』(図5)

京都市文化観光局 1995 「左京四条二坊十町」『京都市内遺跡立会調査概報』平成6年度(図4-3)

京都市文化市民局 2019 「V白河街区」『平成30年度京都市内遺跡発掘調査報告』(図5)

古代文化調査会 2012 『平安京左京一条三坊六町・旧二条城跡』(図4-1)

古代文化調査会 2013 『平安京左京五条三坊五町 烏丸綾小路遺跡』(図5)

財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997 『京都嵯峨野の遺跡』一広域立会調査による遺跡調査報告—京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊(図4-2)

財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007 『平安京左京四条三坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-26 (HKHW)

財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008 『平安京左京三条二坊十町(堀河院)跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-17(図4-4)

財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994 「平安京左京三条三坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』・公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019 『洛史』研究紀要第12号(図4-5)

財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008 『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-10(図5)

財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011 「平安京左京三条三坊七町」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(図4-6)

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015 『平安京左京四条一坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2014-10(図5)

〔付図26 左京三条四坊七町跡SK220(5B)〕公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019 『洛史』研究紀要第12号(図5)  
西近畿文化財調査研究所 2001 『平安京跡(左京四条一坊四町)』西近畿文化財調査研究所報告集第3集(図4-6)

### 〔報告書 平泉〕

岩手県教育委員会 2019 『柳の御所遺跡一堀内部地区内容確認調査一』岩手県文化財調査報告書第155集 平泉遺跡群発掘調査報告書

平泉町教育委員会 2001『平泉遺跡群発掘調査略報－柳之御所跡第53・54次－』（第77集）

平泉町教育委員会 2004『倉町遺跡第4次発掘調査報告書』－毛越寺線都市計画街路整備事業に伴う調査－ 岩手県平泉町文化財調査報告書第88集

〔他〕

上海人民美術出版社・美之美 1984『中国陶瓷全集 16 宋元白磁』上海人民美術出版社・美之美

赤松佳奈 2019「京都・土師器皿研究の歩み」『洛史 研究紀要第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

赤松佳奈 2020「京都出土中国産陶磁器の形・質・割合とその背景（1）－平安時代前・中期の文化人が憧れたものは何か－」『京都市文化財保護課研究紀要』第3号 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

赤松佳奈 2021「京都出土中国産陶磁器の形・質・割合とその背景（2-1）－白磁分類への問題提起－」『京都市文化財保護課研究紀要』第4号 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

魚澄惣五郎・梅原末治 1923「花背村ノ経塚及び関係遺物」『京都府史蹟勝地調査會報告』第四冊 京都府

久保智康 1987「平安後期出土鏡の研究序説」『東アジアの考古と歴史：岡崎敬先生退官記念論集下』岡崎敬先生退官記念事業会編 同朋舎出版

小森俊寛氏・上村憲章 1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要第3号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所

佐藤虎雄 1929「花背村ノ経塚」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第一〇冊 京都府

佐藤雅彦 1978『中国陶磁史』平凡社

徐波・徳留大輔 2015「山東地域における中国南方産陶磁器の流通に関する研究（その1）－宋墓に副葬された事例を中心に」『岩手大学平泉文化研究センター年報』第3号

田澤金吾 1933『鞍馬寺経塚遺宝』鞍馬寺

田中克子 2019「『博多』にもたらされた中国陶磁器－国内消費地との比較材料として－」『貿易陶磁器と東アジアの物流 平泉・博多・中国』岩手大学平泉文化研究センター監修 藪敏裕・森達也・徳留大輔編集

中野政樹 1976日本の美術第42号『和鏡』至文堂

長谷部楽爾 1984「青白磁雑考」月報No.15『中国陶瓷全集 16 宋元白磁』上海人民美術出版社・株式会社美之美

橋川正 1926『鞍馬寺史』鞍馬山開扉事務局出版部

羽柴直人 2009「東北地方における12世紀の貿易陶磁－柳之御所遺跡堀内部地区の貿易陶磁器集計を基礎に－」『貿易陶磁研究 第29号』日本貿易陶磁研究会

平尾政幸 2019「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

馮先銘 1984「解説 宋元青白磁」『中国陶瓷全集 16 宋元青白磁』中国上海人民美術出版社・株式会社美乃美

馮先銘・王莉英 1991「第6章 宋・遼・金の陶磁（960-1279年）第3節青白磁系と龍泉窯系の諸窯」『中国陶磁通史』中国珪酸塩学会 平凡社

前田洋子 1981「和鏡の変遷」『考古学ジャーナル』No.185 ニュー・サイエンス社

三宅敏之 1970「稻荷山の経塚」『朱』第10号 伏見稲荷大社社務所 後再録『経塚論攷』雄山閣出版 1982

三宅敏之 1994「第四章 経塚」『平安京提要』角田文衛監修 財団法人古代学協会・古代学研究所編集

三浦謙一 2015「平泉遺跡群発掘調査の記録－発掘調査報告書から－」『平泉文化研究センター第3集』平泉文化研究センター

三浦謙一 2019「平泉出土の中国産陶磁器の様相」『貿易陶磁器と東アジアの物流 平泉・博多・中国』岩手大学平泉文化研究センター監修 藪敏裕・森達也・徳留大輔編集

森本朝子 2003「博多遺跡群出土の合子について」『博多研究会誌 第11号』博多研究会

八重樫忠郎 1996 「輸入陶磁器から見た柳之御所跡－内部地区と外部地区」『中近世土器の基礎研究Ⅺ』日本中世土器研究会

八木隆久・杉本 宏 1987 「宇治市善法古墓の鏡と輸入陶磁器」『京都府埋蔵文化財情報』第 23 号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

山本信夫 『大宰府条坊ⅩⅤ』－陶磁器分類編－太宰府市の文化財第 49 集 太宰府市教育委員会 2000